

## めずる思い変わらず

辻 憲男（文学部教授）

陽子の宿直の晩に、香戸（こうど）少尉は学校へやって来た。数日前、留守中に家に訪ねてきたのを追いかけて、駅のプラットフォームで言い交わしたのだった。「オルガンがありますか」「ありますわ、ぼろオルガン」。

月明かりの教室で「語れ愛（め）でしまごころ、ひーさしき、むーかしの」と陽子はひいた。秋の虫が鳴いていた。「あなたにお会いした時からあなたが好きだったのです」と少尉は言った。期待し予期していた言葉であったのに、陽子はそれを聞くと、ぼろぼろと涙が大粒に流れ出て、ぼんやりしてしまった。言葉が出なかった。「しかし、今僕はこんな立場で、積極的にあなたをどうすることもできない。どうせ生命はあるはずがないのです」。陽子は少し嗚咽のようなくめきをもらした…。相手はいつ前線におもむくか知れない特攻隊員。やがて出発の日が迫った。陽子は絶望のなかで、どうしてももう一度逢って確かめておきたいと願った（島尾敏雄『ロング・ロング・アゴウ』）。

昭和19年（1944）10月、27歳の島尾少尉は特攻魚雷艇「震洋」の隊長に任命され、長崎県川棚の訓練所から、奄美の加計呂麻島の基地に移った。死の出撃命令を待ちながら終戦を迎えた。そこで小学校教師をしていたミホ夫人と知り合った。上の小説は戦後、神戸市外国語大学に勤めたころに書いた。神戸は住み慣れた故郷である。……陽子は平和の日を夢見た、「汝（なれ）帰りぬ、あうれし」。愛（め）ずる思い変わらず、久しき今も。



島尾がかよった元町の神戸小学校地（現在は神戸生田中学校）。  
香戸は神戸をもじった名前か。